

第4章 間宮林蔵の第2回樺太踏査と西蝦夷地測量

1. 樺太から大陸へ

文化5年潤6月20日(1808.8.11)、松田伝十郎と間宮林蔵の二人が樺太から宗谷に帰ると、松前奉行河尻春之が来ていて、伝十郎から踏査の復命をうけ直ちに林蔵に再踏査を命じたのである。北夷談によると「林蔵儀は、伝十郎が言い付けた通り東海岸奥地まで行かねばならないのに、シレトコから引き返したのは、職務不十分である。そこで再査察を命じる。シレトコから奥の見残しの場所を見届けよ」と命じられた。

二人のこの踏査により、樺太が島であることはほぼ分かったが、踏査の主目的であるロシアの勢力範囲がどこまで及んでいるかは、依然として不明のままであった。特に樺太北東部が未踏査のままでは詳細な地図作りは無理であり、そのためにも林蔵に再検分を命じたとも思われる。これから見るとオホーツク海ぞいの奥地を更に踏査しなければならないが、林蔵は伝十郎が踏査した西海岸を進み、逆からカラフトが島であることをたしかめ、しかも大陸に足を伸ばすことになる。

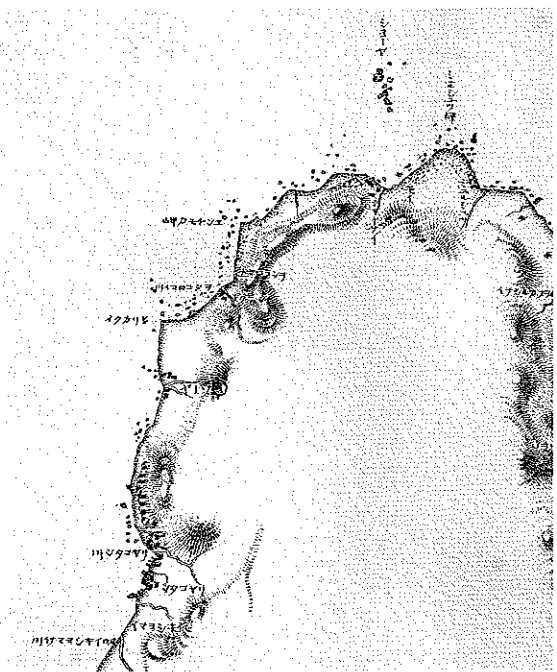
林蔵は7月13日(1808.9.3)再びカラフトに渡り、23日には西海岸のトンナイ(本斗)に着き、尻込みするアイヌ6人と舟を雇って8月3日出発、9月3日トッショカウまで進んだが、食糧が底をついたのと日一日と加わる寒気に堪えかね、一まずトンナイまで引き返して冬を越すほかなかった。

翌文化6年、よほど気がはやっていたとみえ正月29日、早くも6人のアイヌをしたがえて北上をはじめている。

2月2日ウショロに着き、ここで同行6人のアイヌのうち屈強な一人を残してあとは帰し、代りに5人を現地で雇って先を急ぎ、4月9日ノテトにたどり着いた。そして、大陸のゴルジ族がつくったという山丹船を借り受け、案内にニブフ人を雇って待つこと一カ月、5月8日(1809.6.20)、氷海の割れ目を縫うように山丹

船を漕ぎ出して針路を北へとって4日目、カラフトは大陸との距離をひろげるばかり、たどり着いたのは北緯53度15分のナニオー、ここにおいてカラフトは大陸から続く半島ではなく、島であることが完全に立証されたのであった。これで、前年断念した東海岸の北知床のオホーツク海に北部から下って行く必要はなくなった。

林蔵は後に東韃紀行に書いたように「たとえ東岸に至るも魯(ロシア)の経界分明なるべきなく、東韃に入りてその事実を極めたらんには安かるべしと聞き…命なくして異域に入るは又国禁の恐れありと言えども、皆この島に関係する専務なるを以て、その事の真奥を探り尽さずして来らんも再見を命ぜられし甲斐なかるべし」ということで、ノテトの酋長コニーらが大陸のマンコウ河上流のデレンに向かうのに、同行させてもらい大陸に渡ることにした。



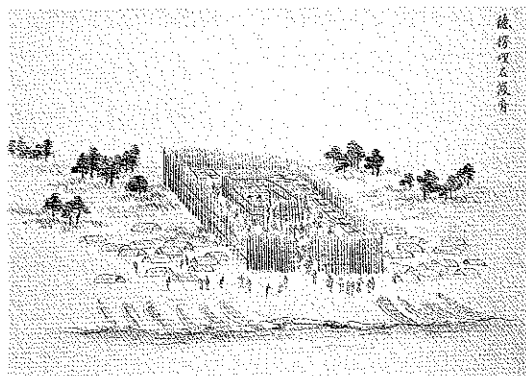
間宮林蔵による西蝦夷の測量

そこで、これまでの踏査結果をまとめ1人残ったアイヌ人に渡し、もしも林蔵が死亡して帰らぬときには、これを自主の役所に届けるように命じて出発の日を待った。

6月26日、山丹船で7人のニヅヒに林蔵が加わってノテトを発ち、時化に遭ったり、舟を担いで山道を抜けたり、湖を漕ぎ渡り、河をさかのぼって7月11日テレンに着いた。

そこは中国清朝の役人が毎年二ヵ月ほど満洲から出張してきて場所をもうけ、各地から集まる様々な民族の貢物(ミツギモノ)、主として沿海州やカラフト方面からやってくる長(オサ)から貂(テン)やその他毛皮をうけとり、そのかわりとして錦織(ニシキ)などを与え、交易の監督にあたっていた。

林蔵はここを「満洲仮府」と名づけている。14、5間四方の丸太の柵を二重にめぐらした中に、左右後方に交易所をもうけ、更にその中間やや後方に一重柵でかこったところが府で、そこに役人がいて監督業務に就いていた。



テレン仮府



テレンでの進貢

交易のあいだ仮府の柵の周囲に様々な民族が小屋や天幕を張って仮居していた。多いときで1,000人くらいの人々が群れているといわれ、林蔵が行ったときも5～600人を数えた。

林蔵はそこに7日間滞在し、大河に舟を浮かべ帰途についたのは7月17日だった。疲れ切った身体を引きずるようにしてカラフトの南端自主に帰ったのは9月15日(1809.10.23)のこと。ここで、林蔵は思いがけない人と再会する。

前年、一緒にカラフト踏査をした松田伝十郎がカラフト詰として駐在していた。

伝十郎は林蔵のこの偉業を讃え、その労をねぎらった。

自主で身体を休めた林蔵は、28日(1809.11.5)出発点の宗谷に戻って、身辺を整理して松前に帰ったのは12月27日(1810.2.1)であった。

一年半に及ぶ大踏査の結果は、天保元年(1830)フランスの地理学者ルクルスによって間宮海峡としてみとめられ、また、林蔵のカラフト図は、オランダの医師シーボルトが嘉永4年(1851)に刊行した「日本陸海図帖」に載せられ、間宮海峡の名は世界地図に輝かしい足跡を刻むことになった。

一年半に及ぶ探検の成果は、その後、林蔵が口述したものを村上貞助によって『北夷分界餘話』と『東韃地方紀行』に編集・筆録されました。(稚内百年史に一部加筆)

●「間宮林蔵渡航の地」

昭和28年7月1日、宗谷発の北海道新聞記事に「間宮林蔵渡航の地」がある。

「……。役場前西海岸は樺太、満州探検の間宮林蔵が寛政11年3月と文化5年10月の再度樺太に船出した縁りの地で遥に利尻富士を望む景勝の地だが今は全く俗化され、あたり一帯は漁臭が立ちこめ当時を偲ぶ何ものもない。」とある。

渡樺の正しい日付は、初航が4月13日、再航が7月13日であるが、渡樺出港の地は役場前西海岸。現在の宗谷西港にあたる場所で、ここより決死の覚悟のもと多くの人達に見送られ樺太(サハリン)に向ったのだろう。この渡樺口は、「申向宗谷運上屋」の図や「宗谷本陣兼絵図面」等の図類に船着場と進入路が描かれている。

2. 西蝦夷地の測量

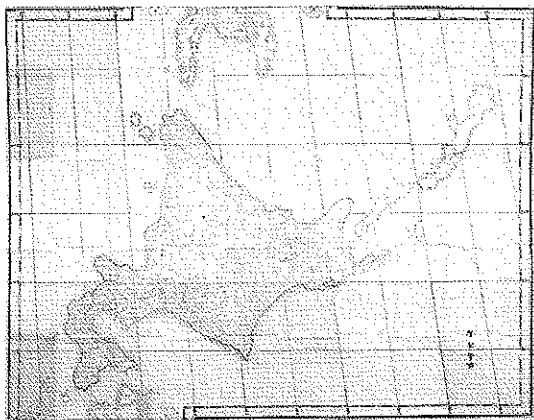
間宮林蔵の業績として、忘れてはならないものに、西蝦夷地の測量がある。

伊能忠敬の蝦夷地測量は寛政12年に行われたが、その範囲は箱館から別海町西別までの太平洋岸だけに終わっている。忠敬は翌年から3カ年計画で残りのオホーツク海岸と日本海岸部の実測を完了する予定のもとに、幕府に計画書を提出したが、経費の関係で許可にならなかった。これを引継いで、北海道沿海図を完成したのは、忠敬の門人である間宮林蔵の努力によるものだった。

間宮林蔵と伊能忠敬の関係は、「寛政庚申の歳(寛政12年)、余亦(マタ)命を稟(ウ)け、蝦夷地を測り、中路倫宗と相見る。是より相親しむこと師父の如し」と忠敬自身が書いているように、寛政12年にはじまっている、倫宗は林蔵の名である。林蔵もこの前年、幕府の絵図師村上島之丞に従い、東蝦夷地の測量にあっていたのであるが、忠敬に逢うにおよんで、その進歩した知識・技術に傾倒し、親しく教えを受けたのである。時に忠敬は55歳、林蔵はわずかに21歳であった。

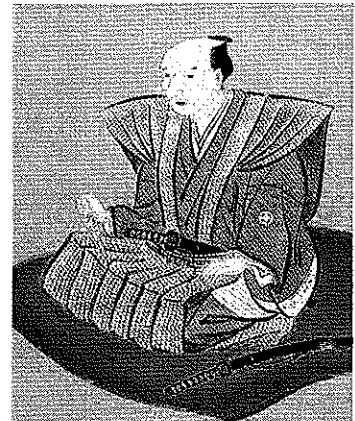
林蔵がその測量技術を西蝦夷地で実施したのは、文化9年からのことと考えられる。文化7年は文化5・6年にわたる樺太・大陸探検の報告「東韃地方紀行」「北夷分界余話」を著し、「北蝦夷島地図」を製作、文化8年3月に報告書を幕府に提出、秋には伊能忠敬から緯度測定法を学び、12月に江戸を発って蝦夷地に向っているからである。その後の蝦夷地における林蔵の行動はあまり詳しく分からない。実測開始から終結にいたる足跡も年月も全く不明である。しかし、文化14年秋には江戸に帰り忠敬の門にもしばしば出入りしている。おそらくそのころ、西蝦夷地実測の野帳(記録ノート)を忠敬に提供し、忠敬がこれを整理して、蝦夷沿海図を完成したものと推測され、西蝦夷地沿岸の測量に文化9年から文化13年までの5年を要したのであろう。

これは伊能忠敬一生の大事業である『大日本沿海輿地全図』の一部をなすもので、これにより北海道の地形は初めて正確となり、その面積も誤りなく



官版実測本地図蝦夷諸島

計算できるようになった。忠敬は、林蔵が蝦夷地実測に努力を傾けていることを、『大日本沿海輿地実測録』で「蝦夷地方の測量は未だ完備せざる故、今間宮林蔵測る所を以て之を参補す」といっており、忠敬実測の残部は林蔵の実測によって行なわれ、「蝦夷国測量図」は伊能忠敬と間宮林蔵の測量によって完成されたものだった。(網走市史に一部加筆)



伊能忠敬